

春休みの読書課題

01155069

永井絵里華

1. 岩波文庫赤帯 311-1 「不思議な少年」 マーク・トウェイン作 中野好夫訳 1969年

表紙の要約には次のように書かれている。「16世紀のオーストリアの小村に、ある日忽然と美少年が現れた。名をサタンといった。村の三人の少年は、彼の巧みな語り口にのせられて不思議な世界へ入り込む……。アメリカの楽天主義を代表する作家だといわれる作者が、人間不信とペシミズムに陥りながらも、それを乗り越えようと苦闘した晩年の傑作」

このサタンという少年は、人間というのはとても愚かでどうしようもないものだという。人間のもつ良心は善と悪を確かに区別する働きがあるが、人間は区別してもたいてい悪の方をとる。そもそも善と悪を区別するから悪が存在するのであるし、良心などいらないという。犬や猫、牛などは人間のするようなひどいことはしないし、よっぽど高潔である。人間は不幸と幸福を区別することもできないし、大多数は少数の奴隷となってくだらない戦争をする。これらのサタンの言説は確かに、と納得してしまいそうになる。しかし、サタンの方はどうなのだろうか。私はサタンのように土の人形を平気でつぶしたり、未来を見てはやく人生を終わらせた方が幸せと言ったりするような天使にはなりたくない。人間が犬や牛を下にみているのとは違うのだろうか。サタンは人間を散々愚かで見下していたが、自分のことはどう思っていたのだろうか。犬や牛や猫だって喧嘩や縄張り争い、育児放棄をする。人間も愚かだが、動物を神聖のように扱うのもどうかと思う。私は、だから人間はその愚かさを自覚したうえでどうすべきなのかが大事だと思った。悪を選んでしまったときはどうすべきか考える。動物を大事にし、人間こそが頂点だとおごらない。不幸だと感じたときは前向きになり、幸福な時は不幸に備える。未来を見ることは人間にはできないのだから、その時その時の最善を尽くす。少数であっても自分の信念をもって立ち上がる。そういうことが大事だということを作者も信じたかったのではないかと思った。

サタンはまた、一生を決めるのは境遇と環境だという。赤ん坊の時に起こったこと、したことによってドミノ倒しのように一生は決まっていくという。実際に少し主人公の友達の起床時間を遅くさせることで運命を変えて見せる。これは、私も何度も考えたことがある。今この道をどちらに曲がって帰るのか、どのお菓子を選ぶのか、トイレに今行くのかあと何分後に行くのか、ということでこの先の人生は無限に広がっていて、選択の連続であると思った。そしてどれを選ぶのかは自分の意志のように思っているけど実はもう決まっているのではないかとも思ったことがある。私はそこまで考えて、だからどうしたと思ってきた。決まっているとしてみてもどの選択をするのか未来はわからないのだし、どうせ悩んだにせよ悩まなかったにせよ選択に従って生きていくしかないのである。あの時ああしていれば、こうしていればということを考え

るのは無駄な時間だとおもう。もしサタンのように未来が見えてしまったら、自分の運命も鎖のようにみえるのだろうか。主人公の友人の友人を助けることも決まっていることだったのか、それとも自分の選択を変えて運命を変えることができたのか、と思った。

ところで、この物語は完結することなく作者は亡くなってしまったため、編者によって多くの改編が行われている。私はそれを知らずに読んだので、最後の11章で違和感があった。突然意味が分かりづらくなったと感じた。この章の前まではサタンのセリフの意味は物語の中ですんなりとわかるような書き方で、とても分かりやすかっただけに、作者が書き終えられなかったのが本当に残念だ。11章は作者がこの物語を三回書き直したうちの最後の稿の断片をくっつけたものであるらしい。最後にサタンが言っていた「あの世なんて、そんなものはないよ」「人生そのものが単なる幻じゃないかね。夢だよ。ただの」「(神は) たのみもしないのに人間をつくりながら、人間の行動の責任は、すべて人間に押しつけて、自分は何の責任もとらない。当然責任は神にあるはずなのに、勝手に人間に押しつけている。そして最後には、いかにも神らしい鈍感さでもいうか、あわれなこの奴隷をだまして、自分を礼拝させようというんだからね……」というセリフはどういうことだったのか。編者は結末以外にも様々な手を加えており、「カトリック、長老派教会、その他の信徒を立腹させると彼らが信じた部分を削除した」らしい。たしかに痛烈なキリスト教批判は少なかったように思われる。しかし、先ほど抜き出した最後のセリフなどはかなり直接的に批判している。私は神や仏を信仰してはいないから、このセリフはすんなり確かになあ、神がいるならみんな幸せにしてくれればいいよなああとぐらいにとってしまうが、神を信じる熱心な信徒はどう思うのだろうか。「あの世なんて、そんなものはないよ」とサタンは言う。私はあの世は信じてはいないけれど、亡くなった祖父が私を守ってくれているとは少し思ったりする。そうすれば前向きになれる気がするからだ。宗教は意味のあるものとおもう。仏壇やお墓に手を合わせるときはいったん現実の考え事とか悩みを忘れられたり、整理できたりする時間になるし、亡き人を思い出すことは重要だと思う。葬儀も生きている人が亡くなった人と一区切りつけて心の整理ができる場だと思う。ただ、昔のカトリックや今の新興宗教のように人々の心の弱さに付け込んだり、お金をとったり、政治に介入するようなことは批判されて当然かと思う。サタンはまた、「人生そのものが単なる幻」ともいう。幻だと割り切って生きていけるのならいいけれど、そう割り切れないから精一杯生きるのではないのかなと思った。幻だろうと、死んだら終わりだろうと、この人生をなんとか悔いのないように生きようとみんな思っているのではないのかなと思った。

2. 光文社古典新書「ピノッキオの冒険」カルロ・コッローディ作 大岡玲訳 2016年
ディズニーのアニメでも有名な「ピノキオ」の原作である。主人公の操り人形のピ

ノキオは勝手に動き出し、言葉を話す不思議な一本の棒切れから生まれる。ピノキオは欲望の赴くままに行動し、そのせいで様々な困難に直面する。物語の最後にはそのような勝手気ままな行動を反省し、操り人形から人間になることができる。

私はピノキオと言えはうそをついて鼻が伸びてしまうというシーンくらいしか知らなかったから、鼻が伸びるといところが二回しかなかったのは意外だった。ピノキオのアニメも絵本も見たことはなかったのでわからなかったが、解説によるとディズニーのピノキオや絵本のピノキオとはかなり違うらしい。確かにピノキオはコオロギを殺したり、やっとな改心したかと思えばすぐに非行に走ったりする、悪い子として描かれている。お父さんが自分の上着を売って買ってくれたアレファベットの練習帳を売ってサーカスを見に行ってしまうし、命を救ってくれた仙女様の下でやっとなまとも学校に行き明日人間の子供になろうかというところで悪友と子供の国に行ってしまう。しかし、この物語に頻繁に登場する、青い目の仙女様という方は、悪いことばかりする悪戯少年ピノッキオを本当に困ったときにいつも助けてくれるのである。私なんかは読んでいただけでしっかりして！とかなんで反省しないのとか苛立ちを感じてしまうのに、仙女様は本当に忍耐力がある。苦い薬を飲まなければ死んでしまうのに駄々をこねるピノキオに薬を飲ませるシーンや、働かなくては飢え死にするのに働きたがらないピノキオを説得するシーンでは、本当に素晴らしい母だと思った。

この本は解説が重要な意味を持っていると思う。解説を読むことでこの物語はいろいろな見方があることに気付くことができる。このストーリーがキリスト教に関係しているのではという説があることもその一つだ。私は、この本を最初から最後まで読んだ感想としては、いい子にしないといけないとか、親を大切にきなさいとか勤勉がいいとかというただの道徳的メッセージが入った童話であると思っていた。だからキリストに関係するなんて少しも気づかなかったのなるほどと思った。私が読書課題の一冊目に選んだ「不思議な少年」もキリスト教関係だったから、本当にキリスト教はヨーロッパに根付いていて、いろんなところで影響を与えているのだなと思った。キノピオの冒険のどのあたりがキリスト教に関係しているのかというと、このお話は放蕩息子のたとえ話と同様の構図をしているのである。放蕩息子のたとえ話は高校の倫理の資料集に載っていて物語調で面白そうだったから印象に残っている。その話は神の愛は誰に対しても注がれていて絶大なものであるということを示すものであるのも習ったから知っていた。しかし、実は納得していないところがあった。この放蕩息子の兄はまじめに父を支えてきたにもかかわらず兄は子山羊ももらえず、遊びほうけてお金が無くなった弟には肥えた子牛がもらえるというのは正直理不尽だと思っていた。実際自分はこの話でいう兄側の人間だと思うし、私の兄はこの話の弟のようなどころがある。もし父がたとえ話通りに兄を手厚く迎えたとしたら私もこの話の兄のように文句を言ってしまうと思う。しかし、キノピオを読んだことをきっかけにたとえ話について調べなおしたところ、この疑問を解消できた。この兄も罪を犯して

いる一人なのである。ただ罪を自覚していないだけである。それは父にたしなめられていることからわかる。表面上では仕事をこなす従順なふりをしながら、心の中ではやりたくないと思っている。父は兄に自分の罪を自覚してほしいとたしなめたのではないだろうか。父は「子よ。おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは、全部お前のものだ」と言っている。兄は父といつも一緒にいることができ、飢えに苦しむこともない生活がどれだけ恵まれているのかわかっていない。弟と自分を比較してばかりいる。このたとえ話をきちんと理解すると、自分もまさにそうだなあと考えた。でも自分も悪い、常に謙虚にいななければならないという生き方は苦しくないのだろうか。私はいつもこんな風に謙虚な気持ちでいることはできないから、せめて飢えに苦しむことや両親といつも一緒にいられることを感謝しようと思った。

ピノキオはこれだけではなく、ほかにもキリスト教に関連しているのではないかとされているところが数多くあるが、同時にこの時期のイタリアの社会問題も示唆していると思われるところも数多く存在する。例えば一番初めに出てきた、ピノキオがお父さんにアルファベットの練習帳を買ってもらった場面。お父さんはとても貧乏で自分の一枚しかない上着を売ってしまう。当時のイタリアでも、とても貧しい労働者の子供に教育を強制する法律が制定され、作者のコッローディは猛反対をしていた。義務教育を受けたところで子供たちは十分な教育とはなりえなかった。さらにピノキオが子供の国に行ってロバになってしまう場面。ピノキオはロバとして商人に売り飛ばされてしまう。これは子供の人身売買を描いているといわれている。このように、ピノキオはただの童話ではなくもっと奥深い話だ。私はそのことを知らなかった。実際この本を選んだ時も読みやすそうだなと思ったからだ。しかし、この本を読んだことで、奥深さに気づくことができた。童話であるからこそ読みやすく、しかし考えさせるという、とてもいい本だった。

3.岩波文庫青帯 466-1「東京に暮らす」キャサリン・サンソム著 大久保美春訳 1994年

この本の内容を簡単に言うと、イギリス人女性が1928年から1936年のあいだ東京で暮らした時の様子をつづったものである。著者のキャサリン・サンソムさんは外交官の夫の赴任に際して日本に滞在した。ちなみに解説によると夫人は一度離婚した後この外交官の夫と再婚しているらしい。横浜で結婚の手続きをし、挙式は東京の英国大使館内の夫の宿舎でした。ここからも日本を気に入ってくれていることがわかるが、この本の内容でも日本を愛してくれたことがとてもよく伝わってくる。著者の日本人への観察眼はとても鋭く、事細かに日本人の気質や生活の様子、文化を記録している。日本を批判するとか下に見るとか、逆に過剰にもちあげるといった感じはなく、ほほえましい、これからもこのまま成長してほしいという感じの見方で、母が子を見守る感じに近い気がした。素晴らしいと思ったことはとことん褒め、よくない風習だと思ったことはそういうところが日本らしい、完璧はない、お互いに理解しようという書き方で、読んでいて気

持ちがよかった。

1928年から1936年あたりというのは第二次世界大戦前の緊迫した時代であったが、そのような雰囲気はまったく感じなかったのも驚きだった。戦争のせの字もなく、1929年世界大恐慌などについても一切触れていない。当時の日本人の様子はイメージとは違ってデパートに行ったり旅行に行ったりしていたのだと知った。床の間がない家は増えたし、会社にコネで入ることも少なくなったけれども、今の日本も同じだと思う部分も多々あった。例えば、本屋で老若男女学生も小さな子供も会社員も立ち読みしている様子や電車での居眠りの様子、デパートでウィンドウショッピングをしている様子などは、今も当時と全然変わっていない。第二次世界大戦の最後のほうのように一般の庶民に戦争の影響が大きくでる前ではあるが、ここまでのどかだったとは驚きだった。

この本では日本人が次々に外国からの新しいものを受容していたということが違う章をまたいで何か所か出てくる。著者は日本らしさを失わずに外国の思想や習慣、娯楽や実用品を取り入れていることを地理的条件や気候に関連付けて分析している。日本は島国でもイギリスと違いほかの国に行くのが困難で、しかも近隣国の中国は他国を下に見る傾向にあり、朝鮮からはすべてを吸収しつくしていたために自国独特の文化や考え方が生まれたという。また、多湿で台風が多く、地震も頻発するということにより忍耐深く状況をおとなしく受け入れる性格ができた。ほかの国とあまりかかわりがなく100パーセント日本人であるために日本文化が揺らぐことはなく、自分たちに必要のあることのみを吸収する。そうすることで外国文化が流入することによって国内に混乱が起こることがなかった。これらの見解は専門家ではないが教養の深い一外国人である著者による勝手な推測だが、私はこの推測は的外れではないような気がした。仏教、神道、キリスト教の建物や行事が混在していたり、和服と洋服を時々によって使い分けたりというように、もとの文化と入ってきた文化を融合させることが日本人は上手であると思う。この特性はもし日本が内陸国であったらここまで日本人しかいない国にはなっていなかったと思うし、もし熱帯地域であったらもっと違う国民性になっていたと思う。

著者が女性であるということもあるのか、この本では女性について多くの記述がある。まず一つ目に、女性の労働についてと、学習した知識が活かされないことである。日本の若い女性は親切で優しく、賢いにもかかわらず地位が低く、安い賃金で雇われ、男性の世話をすることで人生が終わってしまうと嘆いている。せっかく学校で身につけた知識も結婚した後にはいかされない。現在は女性の雇用に関して当時よりはよくなってきているとは思いますが、90年近くたってまだまだ課題が多いというのは少し悲しい気もした。二つ目に、人々が家族に縛られること、特に女性には自由が全然ないことについてだ。夫人の前述したような経歴を考えると本当に日本の女性を不憫に思っていたのだと思う。なぜなら、もし夫人がこの時代の日本人であったら離婚・再婚というのはすんなりできるものではなかったからだ。ただ、悪い面ではあるが、女性は必ず将来の母となるという考え方に基づくお見合い結婚は、結婚したくてもできない女性をうまない

し、衝動的に結婚相手を選んで失敗することもないとも述べている。私も当時はそうであっただろうと思う。しかし、現在においてもいまだに女性は将来の母という考えが残り、女性は家事、男性は仕事、結婚していない女性はかわいそう、夫婦に子供がいないのは変に思うという風潮なのは本当に問題だと思う。外国のように恋愛結婚が主流になって自分たちで結婚相手を見つけるようになったのならば、考え方も変えなければならぬと思う。それによって女性の雇用状況の改善も図ることができると思う。

最後に私がおもしろいと思った部分を紹介したい。「ご飯というのは体中の隙間を埋めつくす位たくさん食べておかないとまたすぐにお腹がすいてしまいます。労働者とそれ以外の日本人との間に食べ方の違いはありません。誰でも同じように食べます。その時には、イギリスのポートワイン鑑定人のような非常な集中力が必要とされます。話に気をとられてはいけません」というところだ。イギリスではお茶碗に口を付けて掻き込むということは絶対にしないから、夫人にとってはこのしぐさをするのがとても大変だったのかなと思った。ものすごく集中しながら真剣にご飯をこぼさないように食べている夫人を思い浮かべるととても面白い。このように、この本には面白い比喻や表現がたくさんちりばめられており、読んでいて声を出して笑ってしまいそうな部分もあるため読みやすいので、おすすめだ。